

特別賞（熊本県教育委員会賞）

ある冬の出来事

御船町立御船中学校 三年 高瀬 員佳

ピョっピョっピョっ

熊本の中にある大きい交差点。私は習い事に行くためにその信号を走って渡った。すぐそこには私が乗らなければならぬバスが止まっていて、走って間に合うかどうか分からない距離だった。「お願い！行かんで！」心の中でそう叫びながら、長い長い信号をうざったく感じながらも歩道に着いた。その時ふと視界にきよろきよろとしておじいさんが見えた。必死で何かを探しているようだった。私も一瞬気になってあたりを見まわしてみただけ、それらしきものは見あたらなかった。

バスはもう目の前。間に合った。乗る瞬間、もう一度おじいさんを見た。やはりまだ、しきりに何かを探していた。「きつと誰かがあの人に声をかけるだろう」「別に私じゃなくても」「見なかったことにしよう」心の中でそう思って、私は足を踏み出した。

「バスが発車します。ご注意ください。」

バスのエンジン音が響く中、私は一つ溜め息をし、今来た道をゆっくり戻った。結局、私はバスに乗らなかった。改めて見ると、おじいさんは足をしきりに動かしてようだった。私は意を決して、

「どうしたんですか？」

と声をかけた。そのおじいさんは私より背が低く、その声にびっくりして私を見上げた。が、目線が合わなかった。私より後ろ、遠くを見ている。「目が見えないのかな」自然と私はそう思った。近所に目の見えない人はいたし、その人と話す時も目線は合わないからだ。私は、もう一度、

「どうしたんですか？」

「あ、点字ブロックが……」

と言いだした。何かを探して、その何かは点字ブロックだったらしい。

「私は目が見えんとです。バスを乗りかえたくて……点字ブロックがあるけん大丈夫と思ったんです。おじいさんが乗りたいバス停は信号の向こうにあった。」

「よかつたら御一緒しましょうか。」

ふいに口についた言葉。さっきの私じゃ考えられない言葉だった。おじいさんは一瞬困った顔をしたら、間を置いて

「よかね？」

と言った。

私はおじいさんが乗るバスが来るまで一緒に待つことにした。おじいさんは苦笑いをしながら、こう話した。

「実は困ったとたつたですよ。嫁と来るはずだったんばってん都合で来れなくなつて。私も頑固なもので『一人で行く』なんて言つたけんですね。本当助かりました。ありがとう。」

視線は合わなかつたけれど、その顔には最初と違い満面の笑みがあつた。

嬉しかつた。と同時に悔しかつた。なぜ私はあの時、迷つていたのだろうか。確かに目の前にバスが来ていたし、とても急いでいた。

「私でなくても誰かがしてくれるだろう」そう思つて一度あの場を通り過ぎた。あの時本当に誰かが声をかけていたら、私は「ああ、よかつた」と安心し、バスに乗り、罪悪感など感じず、いつも通りに過ごしていただろう。そう考えると「私は何をしていただろう」と自分が情けなくなつた。

「経由：行き：。」

おじいさんが乗るバスが着いた。おじいさんは一言、

「本当にありがとうございました。」

と言つて、私にあの満面の笑みを見せてくれた。そして、一段一段確かめるようにして、ゆっくり階段を昇つていった。

バスが発車する。車内におじいさんの姿は見えなかつた。奥の方に座つたのだろうか。

「ありがとう。」

その言葉とおじいさんの笑顔を私は素直に受け取れなかつた。人から見たら「良い事をした」と言われるのかもしれない。だけど私の中で、一瞬でも『迷い』があつたことが許せなかつた。私がある時、すぐに声をかけていたら、こんな後悔は残らなかつたのだろうか。

私はまだ小さく見えるバスを見ながら、心の中で「ごめんなさい」と呟いた。